

1. ジェンダー平等とは？

1.1. ジェンダー平等について

ジェンダー平等は、性別や性のあり方によらず平等に扱われることで、公正、公平、社会正義の基盤です。

● 世界の共通テーマ：SDGs 目標 5

「ジェンダー平等」は、SDGs（持続可能な開発目標）の目標 5 であり、すべての人が性別にかかわらず、同じ機会と権利を持ち、自分の力を発揮できる社会をめざす世界共通のテーマです。

- ◇ 教育における定義：UNESCO (2022) は、「ジェンダー平等の教育とは、男の子・女の子・その他すべての子どもたちが、社会の中で自由に選び、尊重される力を育てること」と定義しています。

● 日本の現状と学校の役割

日本の「ジェンダー・ギャップ指数（男女平等の進み具合）」は、146 か国中 118 位（2024 年時点）と先進国の中でも非常に低い水準です。

- ◇ 日本のジェンダー・ギャップの背景には「無意識の性別役割分担」があり、そのことが一人ひとりの自分らしさや能力を阻む要因にもなっています。学校ではその「無意識の性別役割分担」を再生産しないためにも、「男子は～して、女子は～して」「男らしく／女らしく」といった不要な性別わけをせず、子どもたちが“自分らしく生きる力”を育むことが大切です。ジェンダーに関わらず自分らしく生きられるようエンパワメントすることは、すべての子どもの選択肢を広げることにつながります。

1.2. 多様な性のあり方について

性のあり方（セクシュアリティ）は、以下の 4 つの要素から構成されています。

要素	定義
法律上の性	戸籍など、法律上で割りあてられた性別（日本では男・女の 2 通り）
性的指向 (Sexual Orientation)	どの性別を恋愛の対象とするか／しないか
性自認 (Gender Identity)	自分の性別をどのように捉えているか
性表現 (Gender Expression)	服装、振る舞い、言葉づかいなどでどのように表すか

- ◇ 性的指向と性自認の組み合わせを「SOGI（ソジ）」いい、性のあり方を人権として考える際に使われます。性表現を加えて「SOGIE（ソジー）」ということもあります。

● LGBTQ とは？

LGBTQ とは、性的マイノリティを表す総称のひとつで、以下の頭文字を取った言葉です。

L：Lesbian（レスビアン）：性自認が女性で、女性を好きになる人

G：Gay（ゲイ）：性自認が男性で、男性を好きになる人

B：Bisexual（バイセクシュアル）：男性も女性も好きになる人

T：Transgender（トランスジェンダー）：性自認と生まれた時の法律上の性が異なる人

Q：Questioning（クエスチョニング）：性のあり方を決めていない人

- ◇ その他にも、X ジェンダー・ノンバイナリー（性自認が男女に分けきれない）、アロマンティック（恋愛感情を持たない）、アセクシュアル（性的感情を持たない）、パンセクシュアル（好きになる相手の性別を問わない）など、さまざまなセクシュアリティがあります。他にも LGBTQs・LGBTQ+ などの表記があります。
- ◇ LGBTQ は人口の約 3～10%といわれており、30 人クラスであれば 1～3 人程度であると想定されます。

2. ジェンダー平等を取り巻く国内外の状況

2.1. 国内外のジェンダー平等における現状

ジェンダー平等は、性別や性のあり方によらず平等に扱われることで、公正、公平、社会正義の基盤です。

● 深刻な国際的教育格差

世界全体では教育格差は縮小傾向にありますが、サハラ以南のアフリカや南アジアなどでは、女子が貧困、児童婚、家事労働といった複合的な要因により教育機会を奪われやすい状況が続いています。教育を受けられないことは、その後の女性の健康、経済活動、安全に悪影響を及ぼします。

● 日本のジェンダー・ギャップ指数の詳細

- 日本の順位が低い（2024 年時点で 118 位）ことの主な原因は、政治分野と経済分野の格差にあります。女性の国会議員・閣僚の割合の低さ、管理職の女性比率の低さ、男女間賃金格差の大きさなどが挙げられます。
- 教育分野においては、初等・中等教育の就学率はジェンダーによる差異がほぼないものの、大学・大学院など高等教育においては、女性の進学率が低いこと、女子が理系や特定の専門分野を選択しにくいという進路の「無意識の偏り」があることが課題です。

● 国内の取り組み

- 女子差別撤廃条約：1979 年に国連で採択され、1981 年に発効、日本は 1985 年に批准しました。女性に対するあらゆる差別を撤廃し、平等を達成するための国内法整備の根拠となっています。
- 男女雇用機会均等法（1986 年施行）：採用、配置、昇進、賃金など、雇用の分野における機会と待遇を男女で平等にするため、企業に対して、性別を理由とした差別的扱いの禁止や、セクシュアルハラスメント等の防止等を義務付けています。
- 男女共同参画社会基本法（1999 年施行）：男女が社会の対等な構成員として、あらゆる分野に参画し、均等に利益を享受できる社会の実現を目指しています。
- 男女共同参画白書：男性の家事・育児・介護への参画を促す環境整備や、ポジティブ・アクション（積極的改善措置）の推進など、具体的な施策の方向性を示しています。

2.2. LGBTQ の児童・生徒と学校の状況

LGBTQ の子どもたちにとって、学校や家庭は、必ずしも安心できる場所とは限りません。調査では、LGBTQ 中学生の 40% がこの 1 年で学校でいじめを経験し、LGBTQ ユースの 88% が保護者との関係に困難を抱えています。この 1 年で、10 代 LGBTQ の 2 人に 1 人 (54%) が自殺を考えたことがあり、5 人に 1 人 (20%) が自殺未遂をしています。学校が安全で安心できる場所であることが何より重要です。一方、困難な状況にあるなかで、LGBTQ 中高生の 95% が担任の先生にセクシュアリティを安心して相談できないと回答しており、先生にも頼れていないという状況があります。

<声>

- 中学で友達に「同性愛者は無理」と言われ、親にも自分をさらけ出せたことはない。相談できる相手もなく、首吊り自殺をはかった。(14 歳・神奈川・レズビアン)
- 「オカマ」と言われて石をぶつけられるなどのいじめを受けていましたが、先生に相談しても聞いてもらえませんでした。性別違和があり、制服がつらいと伝えると「あんたはおかしい。それは一時の気の迷いだ」と否定されました。(23 歳・岡山・トランスジェンダー男性、パンセクシュアル)
- 「お前らホモなんだろう？隠さずに言え」と、仲の良い男子生徒二人に向けて教員が言うなど、小中学校では教員の理解がほとんどありませんでした。(19 歳・東京・トランスジェンダー男性)

出典：認定 NPO 法人 ReBit (2025) 「LGBTQ 子ども・若者調査 2025」

● LGBTQ に関する法律・指針

学校では、教育・啓発、環境整備、相談機会の確保などが各種法律・指針で求められています。

- 2015 年 文部科学省から「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」の通知が発出。
- 2016 年 文部科学省から周知資料「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について」が発出。
- 2017 年「いじめの防止等のための基本的な方針」改訂：性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒に対するいじめを防止するため、性同一性障害や性的指向・性自認について、教職員への正しい理解の促進や、学校として必要な対応について周知することが明記。
- 2022 年 生徒指導提要改訂：「性的マイノリティに関する課題と対応」という項目が新設。いじめや差別を許さない生徒指導や人権教育、相談しやすい環境の整備、相談があった場合の支援体制の検討、服装や呼称の柔軟な対応等を明示。
- 2023 年 LGBT 理解増進法：学校に教育・啓発、教育環境の整備、相談機会の確保の努力義務を明記。

3. ジェンダー平等を推進するために、先生ができる4つのこと

1 アンコンシャス・バイアス（無意識の思い込み）に気づく

「男の子だから元気」「女の子だからやさしい」など、性別によるイメージを無意識に言葉にしていないか、自身の発言をチェックしましょう。先生の言葉は子どもたちに大きな影響力があります。無意識の思い込みに気づき、意識的に多様な価値観を伝える姿勢が大切です。

2 「男らしさ」「女らしさ」を押しつけない

制服、役割分担、言葉づかいなど、性別で決めつけることを避け、それぞれの個性・得意を尊重し、「自分らしさ」を肯定できる環境をつくることが重要です。例えば、「机運ぶから、男子4人来て」ではなく、「机を運ぶのを手伝ってくれる人、4人来て」と言いかえるなど、学校の日常でよくある男女分けの場面に気づき、別の方法を選択することで、無意識の性別役割分担を変えていくことができます。

3 ジェンダー平等と女性のエンパワメントを意識する

学校は子どもたちに希望を与えるロールモデルと出会う場でもあります。

- ロールモデル：女性の先生がリーダーシップを発揮できる環境を整え、「理系」「経営者」「研究職」などの分野で女性が活躍できることを積極的に紹介する。図書や、国語・英語等の教材の選定時は、主人公のジェンダーバランスにも配慮する。
- ジェンダー平等社会の体現：校内の管理職・委員会などでもジェンダーバランスを意識する。

4 LGBTQを取り残していないか意識する

LGBTQの理解者・支援者・味方である「アライ（Ally）先生」として、誰もが過ごしやすい学校づくりを進めてください。

- LGBTQについて学ぶ機会の提供：教職員研修や、保護者への通信で扱う等、大人が学ぶ機会をつくる。また、LGBTQに関する本や資料を保健室・図書室に置いたり、授業を行うことで児童生徒が学ぶ機会をつくる。
- 不要に男女でわかれていることがないか点検する：呼称の「さん／くん」呼びわけ、グループ分けや整列、持ち物の色等、不要に男女分けされていることがないか点検し、あった場合は違う分け方を工夫する。
- 声掛けに無意識のバイアスがないか点検する：「男だから」「女だから」といった無意識のバイアスがないか点検したり、「彼氏／彼女」ではなく「パートナー」など、性を限定しない言葉を使う。
- アライであることを伝える：6色のレインボー（赤・橙・黄・緑・青・紫）を身につける等、アライであることを可視化する、等

<コラム>性のあり方について相談を受けたとき

性のあり方について相談を受けた時は、以下の「3つのステップ」と「2つの『ナイ』」を意識して対応しましょう。

3つのステップ

① 聴く

安心して話せる場をつくり、「話してくれてありがとう」と伝える。

② いっしょに考える

困りごとや求める対応と一緒に整理し、できることを考える。

③ つなげる

必要に応じて相談機関や専門家につなぐ。

相談先一覧：<https://allyteachers.org/consultation>

2つの「ナイ」

① 決めつけない

セクシュアリティは本人が決めるもの。他人が判断しない。

② 広めない

相談内容は本人の許可なく共有しない（守秘義務）。家族や管理職にも無断共有は厳禁。

4. 御校の取り組みに、ReBit がお手伝いできること

認定 NPO 法人 ReBit（りびっと）は、LGBTQ もありのままで未来を選択できる社会づくりに取り組む団体です。学校でご活用いただける様々な無料教材をご用意しています。

1 無料・先生が学ぶための資料

「Ally Teacher's Tool Kit：安心な学校をつくろう編」は、教職員向け e ラーニング研修や相談対応・学校環境づくりに関する資料キットです。先生個人でも、教員研修などでも活用いただけます。

▶ <https://rebitlgbt.org/teacher/>

2 無料・先生の授業実践を補助する資料

「Ally Teacher's Tool Kit：授業実践編」は、先生が授業を行う際に使える教材キットです。小学校高学年版と中学校版があり、学習指導案・ワークシート・映像教材が含まれています。

▶ 小学校高学年版：<https://rebitlgbt.org/shougakko/>

▶ 中学校版：<https://rebitlgbt.org/chugakko/>

3（有料）LGBTQ 講師に授業／研修を依頼する

ReBit は学校・教育委員会等で LGBTQ に関する授業や研修をこれまで 2100 回以上実施しています。

▶ 授業／研修依頼：<https://rebitlgbt.org/contact/>

認定 NPO 法人 ReBit とは？

ReBit（りびっと）は、LGBTQ もありのままで未来を選択できる社会づくりに取り組む認定 NPO 法人です。（設立 2009 年、法人化 2014 年。所在地：東京都／大阪府）LGBTQ もありのままに「学ぶ・働く・暮らす」ための事業を行っています。